

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發

竹村, 則行
徳島大学教養部 : 講師

<https://doi.org/10.15017/9773>

出版情報 : 中国文学論集. 9, pp.54-82, 1980-11-01. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發

竹村 則行

一

清朝の新體制が名實共にほぼ確立された康熙十八（一六七九）年に清朝最初の博學鴻詞科が行なわれ、五〇名に及ぶ一代の碩學が特別に任用されている。その五〇名の氏名は次の通りである。

第一等二十名 彭孫遯・倪燦・張烈・汪霏・喬萊・王頊齡・李因篤・秦松齡・周清原・陳維崧・徐嘉炎・陸萊・

馮勗・錢中諧・汪楫・袁佑・朱彝尊・湯斌・汪琬・丘象隨

第二等三十名 李來泰・潘耒・沈珩・施閏章・米漢雯・黃與堅・李鎧・徐鉉・沈筠・周慶曾・尤侗・范必英・崔

如岳・張鴻烈・方象瑛・李澄中・吳元龍・龐塏・毛奇齡・錢金甫・吳任臣・陳鴻績・曹宜溥・毛

升芳・曹禾・黎騫・高詠・龍變・邵遠平・嚴繩孫^①

この中には李因篤・陳維崧・朱彝尊・汪琬・潘耒・施閏章・尤侗・毛奇齡・嚴繩孫などといった、清初文學の形成に與つて力あつた著名な文人の名前が綺羅星の如く輝いており、在野の遺賢を召出す博學鴻詞科の所期の目的

は、ほぼ達せられたかのようである。時を同じくして實施された康熙十八年己未科の進士題名碑録には、趙執信を除いて文學史的にさほど重要な文人の名が擧がっていないことを見ても、いよいよこの感を強くする。従つて、後世の文人もまた、この博學鴻詞科の成果について等しく高い評價を與えてきた。例えば沈德潛が、

理學・儒林・名臣・碩輔、皆出其中。人文之盛、爲本朝設科之冠。擬之唐宋、蓋遠過云。⁽²⁾

理學・儒林・名臣・碩輔皆其の中より出づ。人文の盛なる、本朝設科の冠爲り。之を唐宋に擬するも、蓋し遠かに過ぎたり。

と述べ、吳騫が、

收羅天下賢雋・奇才・異能之士、雖布衣・韋帶・巖穴・幽隱、莫不徵求辟薦。⁽³⁾

天下の賢雋・奇才・異能の士を收羅し、布衣・韋帶・巖穴・幽隱と雖も徵求辟薦せざるは莫し。

と述べ、さらにまた孟森が、

康熙己未、取士最寬、而最爲後世所傳述。性道・事功・詞章・考據、皆有絕特之成就。⁽⁴⁾

康熙己未、士を取るは最も寬く、而して最も後世の傳述する所と爲る。性道・事功・詞章・考據、皆絶特の成就有り。

と述べているのはその例である。

しかしながら、この博學鴻詞科については、康熙十八年というその時期と、明史編纂というその目的とを併せ考へた場合、ここに擧げられた五〇名はともかくも、ここに擧げられなかった、或いは擧げられることを極力回避し

た許多の文人の存在が、それに劣らず重要な位置を占めることは言うまでもない。今、秦瀛『己未詞科錄』に據れば、それらの文人の名前は次の通りである。

試に臨んで病を告ぐる者二人 傅山・杜越

憂に丁り、未だ試に與らざる者十四人 曹溶・汪懋麟・黃虞稷・王穀韋・陳學夔・戴王綸・林以畏・陸隴其・

惠周惕・張貞・錢芳標・彭桂・柯崇樸・柯維楨

未だ試せずして病故する者三人 葉舒崇・郁植・陳九勝

未だ試せずして致仕する者一人 祝宏坊

病を患い、行催さるるも到らざる者十四人 應搗謙・張新標・范鄙鼎・王追騏・稽宗孟・蔡方炳・陸舜・李容・

黃宗羲・張九徵・魏禧・顧景星・顧豹文・章貞（中途にして病を告げ與らず）

京に到るも疾と稱して試に與らざる者二人 紀昀・王宏撰

試に與るも未だ用ひられざる者九十五人 閻若璩・田雯・稽永福・吳雯・楊遵吉・馮雲驥・畢振姬・顧鼎銓・

葉封・陳玉瑾・陳儋・孫榮・李念慈・吳農祥・張瑞徵・許先甲・趙進美・陸

元輔・王念眞・任辰旦・陸次雲・許自俊・魏學渠・儲方慶・周之道・鄧林

梓・李良年・江圖・白夢鼎・林堯英・葉灼棠・葉奕苞・田茂遇・馮行賢・王

祚興・徐林鴻・羅坤・楊毓蘭・黃始・宋維蕃・金居敬・王岱・施清・高層雲

・張英・宋實穎・譚吉璉・王孫蔚・毛際可・王紫綬・上官鑑・法若眞・王廷

辭して就かざる者十二人

璧・李大春・徐威清・傅晨・侯七乘・張霍・成其愿・宋昱・徐懋昭・陶元
淳・王鉞・董兪・李芳廣・潘颺言・徐之凱・徐孺芳・趙廷錫・潘藩大・張含
輝・郎載瓚・李瑞徵・陳筴・葉方蔚・許蓀荃・程大呂・程必昇・趙驪淵・陳
宏・陳懷眞・高向台・宋涵・馬駿・朱培・程易・朱士曾・劉瑞遠・戴茂隆・
李開泰・邵允彝・林鵬・張能鱗・周起莘・趙廷颺

期に後れ、未だ試せざる者二人 夏駟・方象璜

擧げらるも期に及ばざる者一人 姜宸英

補遺二人（薦を辭して就かず） 周容・錢肅潤

これを見ると、この時一度は推薦を受けたものの、何らかの理由を設けて清朝の召請を辭退している者に、傅山・陸隴其・黃宗羲・王宏撰・顧炎武・萬斯同・李清などといった當時第一級の碩學の名前があげられる。彼らに共通するものは、彼らが等しく明の遺民であることである。これら明の遺民の多くを採用することに結果的に失敗した點について、先に述べた博學鴻詞科の成果も實は大いに割引いて考えねばなるまい。

又、陳守實は次のように述べている。

鴻博科開、威脅利誘、一時列薦剌者、幾二百人。剛介者、以死自誓、而迫促頓摧、幾無人狀。巽懦者、威脅之

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

來、口呿不言、而宛轉遷就、以史爲籠、以威爲怵、以利爲誘、而天下無可逃之人矣。⁽⁵⁾

鴻博の科の開かるるや、威もて脅し、利もて誘ひ、一時の薦剡に列する者、二百人に幾し。剛介なる者、死を以て自ら誓うも、迫^ま促^まられて頓^{くじ}摧^けけ、幾んど人の狀^{かた}無し。異儒なる者、之が來るを威^{おそ}懼^れれ、口は呿^おえて言はず、而も宛轉として遷就す。史を以て籠と爲し、威を以て怵と爲し、利を以て誘と爲す。而して天下に逃ぐ可きの人無し。

この記事からもわかるように、康熙十八年に行なわれた清朝最初の博學鴻詞科は、明の遺民であるにせよ、清の忠臣であるにせよ、當時に生きる全ての文人に嚴しく明確な態度の選擇を迫つたものであり、その後の清朝文學の展開を考える上において、甚だ重要な一大轉期として、或いは新たな出發點として機能したと考えられる。

ところで、この時擧げられた五〇名の中、李因篤・馮勛・朱彝尊・潘耒・嚴繩孫の五名は布衣出身である。即ち、彼らは清朝治下であつてこの時まで清朝に仕えることをせず、この時始めて清朝の祿を食んだ者達である。彼らはこの博學鴻詞科のいわば眼玉的存在であり、當時から既に世評高く喧傳されていた。例えば康熙帝が、

聞江南有三布衣。尙未仕耶。

江南に三布衣有りと聞く。尙お未だ仕へざるや。

と言つて、わざわざ所謂江南の三布衣⁽⁶⁾の安否を下問したエピソードはよく知られているし、王士禎の『池北偶談』に「四布衣」の條を設けるのを始めとして、彼らに言及する當時の文獻は數多い。蓋し、清朝側或いは文人の雙方にとつて、彼らの存在が幅廣く天下の人材を召出す博學鴻詞科の恰好のバロメーターとして殊更に際立つた故であ

ろう。

ところが、こうして鳴り物入りで清朝に仕えたはずの彼らであるが、後に詳しく述べるように、その後の經歷は必ずしも順調ではない。即ち、数年を経ずしてその悉くが宮中を逐われ、再び野に下って餘生を終っているのである。實のところ明の遺民でもなく、さりとて積極的に清の忠臣でもなかった彼らであるが、その人生の軌跡は、明清の過渡期をそのまま反映して甚だ象徴的であり、かつ運命的でさえある。

私は本論において、以上の経過をふまえつつ、この布衣の士を中心にした當時の文人の動きを把握することによって、康熙十八年に行なわれた清朝最初の博學鴻詞科の清朝文學史上に占める意義、或いは役割について考え、併せて清朝文學の出發の仕方についても考察を加えたいと思う。

二

康熙十七（一六七八）年正月二十二日⁽⁷⁾、康熙帝は吏部に命じて次の諭旨を下し、新たに博學鴻詞科を開いて廣く天下の碩學を任用することを宣告する。

自古一代之興、必有博學鴻儒、振起文運、闡發經史、潤色詞章、以備顧問著作之選。朕萬幾餘暇、游心文翰、思得博學之士、用資典學。我朝定鼎以來、崇儒重道、培養人材。四海之廣、豈無奇才碩彥、學問淵通、文藻瑰麗、可以追蹤前誥者。凡有學行兼優、文詞卓越之人、不論已仕未仕、令在京三品以上、及科道官員、在外督撫布按、各舉所知。朕將親試錄用。⁽⁸⁾

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

古自り一代の興るは、必ず博學鴻儒の文運を振起し、經史を闡發し、詞章を潤色し、以て顧問著作の選に備ふる有り。朕は萬幾の餘暇、心を文翰に遊ばし、博學の士を得、用て典學に資せんと思ふ。我朝は定鼎以來、儒を崇び道を重んじ、人材を培養す。四海の廣き、豈に奇才碩彦の學問淵通し、文藻瑰麗にして、以て前詰を追跡すべき者無からん。凡そ學行兼て優れ、文詞卓越の人有らば、已に仕へ未だ仕へざるとを論ぜず、令して在京は三品以上及び科道官員、在外は督・撫・布・按、各おの知る所を舉げよ。朕將て親試録用せん。

ここには國家の威信と人材の登用とにかける康熙帝の絶對の自信が溢れているが、その言葉通り、強大な國家權力を背景にしてこの臨時の特別國家試験は遲滞なく實行に移された。この辟召に應じ、各部の推薦を経て、陸續として京師に馳せ集った者百八十六名は、特にその高齡を配慮して嚴寒時の試験を避け、翌康熙十八年三月初一日、宮中の體仁閣において召試が行なわれた。試題は璿璣玉衡賦（四六序）・省耕詩（五言排律二十韻）である。朱彝尊をはじめ、この試験を受けた文人の文集に今もなおこの題を賦する詩文が多く残るのは、この時の答案文である。閱卷官は大學士戸部尚書李蔚・大學士禮部尚書杜立德・大學士刑部尚書馮溥・掌院學士禮部侍郎葉方藹であった。越えて四月六日には成績發表がなされ、成績をそれぞれ上・上・中・下の四等に分ち、上上卷二〇名を一等、上卷三〇名を二等として合計五〇名を正式に任用し、中卷下卷の者は下第としたのである。先ほど挙げた『己未詞科錄』中の「試に與るも未だ用ひられざる者九十五人」とはこの下第の者達の謂である。

この五〇名は次いで史館に入り、明史纂修にたずさわることになる。清朝による明史の編修が飛躍的に進んだのは、實にこの五〇名の貢獻に據るものが大きいのであるが、今、李晉華『明史纂修考』を参照すれば、今日の

『明史』の中で、これらの文人による執筆分擔箇所が明らかになっているものは次の通りである。

尤 侗——弘正諸臣列傳、外國傳、藝文志等篇。

毛奇齡——弘正二朝紀傳及諸雜傳。

湯 斌——天文志、曆志、五行志、及正統・景泰・天順・成化・弘治五朝列傳、太祖本紀、后妃傳等篇。

方象瑛——景帝本紀、及景泰・天順・成化・隆慶・萬曆・天啓・崇禎各朝臣傳共八十六篇。

朱彝尊——文皇帝本紀、及洪武朝臣傳三十篇。

施閏章——景泰・天順各朝列傳。

汪 琬——各朝列傳百七十五篇。

沈 珩——列傳十餘篇、及各朝本紀論贊。

徐嘉炎——建文帝本紀。

陸 棻——文皇帝本紀、及漕河・水利・藝文・選舉諸志。

倪 燦——藝文志序。

潘 耒——食貨志兼他紀傳、自洪武以下五朝稿、皆所訂定。

徐 鉉——兪（大猷）・戚（繼光）・劉馬諸大傳。

嚴繩孫——隱逸傳。

喬 萊——崇禎長編。

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

それではこの博學鴻詞科に對し、當時の一般の文人はどのような反應を示したのであろうか。清朝に入って最初の博學鴻詞科が開かれるというニュースに接した當時の文人は、各自の置かれている立場によって概ね二つの異なつた反應を見せているように思われる。その一つは、これを清の忠臣として又とない出世のチャンスとして把える態度であり、今一つは、自分をあくまで明の遺民として規定しつゝ、できうる限り清朝の招請から逃れようとする態度である。まず前者に關する記事資料をいくつかあげて検討してみたい。王應奎「柳南隨筆」に、

於是隱逸之士、亦爭趨輦轂。惟恐不與。⁽¹⁰⁾

是に於て隱逸の士、亦た争ひて輦轂みやこに趨く。惟だ與らざるを恐るるなり。

という記事があるが、このように「隱逸の士がバスに乗りおくれまいとして争つて天子のお膝元へやって來る」とは、博學鴻詞科を出世の手ずるとして考えた者の謂いであらう。實にこの時、山中に隱遁していたはずの伯夷叔齊の輩が、あるうことか首陽山を下りていそいそと清朝に仕えようとした事例は數多くあつたらしく、浦起龍「不是齋筆記」に、

當時前代遺民、多膺徵辟。是以獻嘲者有「無數夷齊下首陽」之語。⁽¹¹⁾

當時前代の遺民に徵辟に膺するもの多し。是を以て嘲を獻ずる者に「無數の夷齊、首陽を下る」の語有り。と述べるのはその例である。後に改めて取りあげる顧炎武も、自分がこの類の者と同一視された事によほど侮辱を感じたらしく、次のように彼らを「名を釣る者」だとして罵倒している。

頃者東方友人書來、謂弟盍亦聽人一薦。薦而不出、其名愈高。嗟乎！此所謂釣名者也。⁽¹²⁾

頃者^{おとどろ}東方の友人より書來り、謂ふ「弟^{なな}盍^なぞ亦た人の一たび薦むるを聴かざる。薦められて出でずんば、其の名愈^{いよいよ}よ高からん」と。嗟^あ乎^あ！此れ所謂名を釣る者なり。

次いで、光聰^{あきと}諸「有不爲齋隨筆」、あるいは阮葵生「茶餘客話」等に見える打油詩の

縱然^{もし}博得^{はくとく}虛名色、袖裏應持廿四金⁽¹³⁾

縱然^{もし}虛の名色を博し得ば、袖裏に應に廿四金を持つべし

などは、その推薦に當たつて買官工作資金として幾何かの賄賂がおくられたことを匂わせるものであり、ここまで來れば政治倫理も何もあつたものでなく、當時世上をにぎわせていた所謂「損納」問題よりも更にゆゆしき問題であると云えるであろう。更に、晴れて博學鴻詞科に合格した毛奇齡が、當時遺民としての餘生を送っていた張岱に對して、

夫名山之藏、本待其人。久闕不發、必成物怪⁽¹⁴⁾。

夫れ名山の藏は本と其の人を待つ。久しく闕^とじて發^はかざれば、必ず物の怪と成らん。

などと云うように、實に傲慢不遜な態度で明史の資料提出を要請する手紙を書き送つたことは、當時既に心ある文人の輦轡を買つたものであるが、毛奇齡にとつてこの博學鴻詞科がどんな意味を持っていたかを象徴的に示すエピソードだと言へるのではあるまいか。

こうして、博學鴻詞科によせる各人各様の反應を見ると、その一方においては、これを單なる出世の爲の千載一遇のチャンスとしてしか把えることのできない文人も確かに數多くいたことが明らかになる。或いは量的には

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發 (竹村)

この種の文人が最多數であつて、最も普遍的であつたのかも知れない。今日我々が博學鴻詞科の意義と役割とについて考えるとき、この一方の側面も見すごしにすることはできないと私は思うのである。

三

さてここに、そのように博學鴻詞科に一獲千金を狙う輩とは對照的に、清朝側の再三の要請にもかかわらず、竟に清朝に仕えることなく、明の遺民としての生涯を貫き通した文人として、顧炎武や黃宗羲の名前をあげることができる。

顧炎武（一六一三—一六八二）は江蘇崑山の人。一六四五年、明清の鼎革後も明朝再興の願望を最後まで棄てず、蔣山傭と名を變え、地下に潛行して抵抗を續けた硬骨漢である。その彼の反清活動を支えたバックボーンとして、清朝に抗し絶食して果てた養母王氏の次の遺言があつたことを、顧炎武自ら「泣血して謹しんで。狀べ」ている。

遺言曰、我雖婦人、身受國恩、與國俱亡、義也。汝無爲異國臣子、無負世世國恩、無忘先祖遺訓、則吾可以瞑於地下。⁽¹⁵⁾

遺言に曰く、我れ婦人と雖も身は國恩を受く。國と俱に亡ぶは義なり。汝、異國の臣子と爲る無く、世世の國恩に負く無く、先祖の遺訓を忘る無くんば、則ち吾れ以て地下に瞑すべしと。

この遺言に象徴されるように、實に嚴しい時代狀況を生きた顧炎武にとつて、康熙十七年の博學鴻詞科の推薦は、やはりどうしても固辭せざるを得ない試練であつた。即ち彼は、明史館總裁である葉方藹からの執拗な任官要

求にもかかわらず、次のように述べてこれを強硬につっぱねているのである。

七十老翁何所求、正欠一死、若必相逼、則以身殉之矣。⁽¹⁶⁾

七十の老翁何をか求むる所ぞ。正に一死を欠くのみ。若し必ず相逼らば、則ち身を以て之に殉せん。

最も親しい友人であり、且つ學問上の弟子でもあった潘耒に宛てた手紙の中でも、彼は次のように「果して此の命有らば、死に非ずんば則ち逃げん」と、その堅強な決意を披瀝している。

先妣以三吳奇節、蒙恩旌表。一聞國難、不食而終、臨沒丁寧有無仕異朝之訓。辛亥之夏、孝感特東相招、欲吾佐之修史、我答以果有此命、非死則逃。⁽¹⁷⁾

先妣は三吳の奇節を以て、恩を蒙り旌表さる。一たび國難を聞くと、食せずして終る。沒するに臨んで丁寧めて異朝に仕ふること無かれの訓有り。辛亥（一六七一）の夏、孝感特に東して相招き、吾に之が修史を佐けんことを欲す。我答ふるに以て、果して此の命有らば、死に非ずんば則ち逃げんと。

ついで次の詩は、その顧炎武が變節者の溢れる京師の現状を苦々しく思っていた様を示すものである。清水茂氏によれば、この一首は、この時の博學鴻詞科をめぐる「名利を逐う人々と、節操を守って隱遁する人とを對比し、後者の永遠の生命あるを説く」⁽¹⁸⁾ものである。

谷口耕畬少 谷口に耕畬少なく

金門待詔多 金門に待詔多し

時情尊筆札 時情は筆札を尊び

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

吾道失弦歌 吾が道は弦歌を失す

夜月辭雞樹 夜月は雞樹を辭し

秋風下雀羅 秋風は雀羅に下る

尙留園綺跡 尙お留む園・綺の跡

終古重山阿 終古に山阿を重んず

こうして明の遺民としての生涯を貫徹しようとする顧炎武にとって、潘耒や李因篤、更には朱彝尊などといった、かつては夜を徹して語りあかした同志達が、この博學鴻詞科を轉機にして次々に轉向して清朝に降つてゆくのを眼のあたりにするのは、何ともやるせないことであつた。次の「寄同時二三處士被薦者」⁽¹⁹⁾には、その怒りとさびしさとがよく現われている。徐嘉『顧詩箋注』卷十六によると、この「二三處士」とは、潘節士之弟耒・李處士因篤・朱處士彝尊の三名を指す。即ち、いずれも本稿において私がこれから取上げようとする、布衣のまま博學鴻詞科に擧げられた者達である。

關塞逾千里 關塞 千里を逾え

交遊更幾人 交遊するは更に幾人ぞ

金蘭情不二 金蘭 情 二つならず

猿鶴意相親 猿鶴 意 相親しむ

鄴下黃塵晚 鄴下 黃塵の晚

商顏綠草春 商顏 綠草の春

與君成少別 君と少別を成し

知復念蘇純 復た蘇純を念ふを知らんや

次に、黃宗羲（一六一〇—一六九五）は浙江余姚の人。明末の政亂には一門を率いて各地を轉戦し、わが長崎にも乞師に來たことがある程、その反清活動は際立っていた。彼もやはり、顧炎武と同じく、その主義主張の必然の歸結として、葉方藹や徐元文など清朝高官による仕官の要請を最後まで堅く拒み續ける。その孤高の態度は、當時から既に世評高く噂されていた。次はその一例である。

黃梨洲先生、前明遺老、爲海内推重。²⁰

黃梨洲先生、前明の遺老、海内の推重するところと爲る。

又、彼が『明夷待訪錄』の著述に着手したのは、全祖望のあとがきによれば、次のように、明朝の血筋を引く最後の王桂王が雲南で吳三桂に殺され、明の復興がもはや絶望的となつて以後のことである。

明夷待訪錄一卷、姚江黃太冲徵君著。同時顧亭林貽書、嘆爲王佐之才、如有用之、三代可復。是歲爲康熙癸卯、年末六十、而自序稱梨洲老人、萬西郭爲予言、徵君自壬寅前、魯陽之望未絕、天南訃至、始有潮息煙沈之嘆、飾巾待盡、是書於是乎出。蓋老人之稱所自來已。²¹

明夷待訪錄一卷、姚江黃太冲徵君の著なり。時を同じくして顧亭林書を貽り、王佐の才爲るを嘆じ、如し之を用ふる有らば、三代も復すべしと。是の歲、康熙癸卯（一六六三康熙二年、黃宗羲五三歲）爲り。年未だ六十なら

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

ず、而るに自ら序して黎洲老人と稱す。萬西郭、予が爲に言へり。徵君、壬寅（一六六二康熙一年）より前、魯陽の望み未だ絶えざるに、天南より計至り、始めて潮息^{あせ}み煙沈むの嘆有り、飾巾して盡くるを待つ。是の書はに於てか出づと。蓋し老人の稱の自りて來る所なり。

ここに全祖望も「如し之を用うる有らば、三代も復すべし。」といい、顧炎武がその「王佐の才」に感嘆したことを述べているが、更に、次のように、顧炎武が黃宗羲のこの書について強い共感の念を示す手紙を書き送っていることは、明の遺民としてのこの時の兩者の立場からして當然のものであったと首肯できる。

頃過薊門、見貴門人陳萬兩君、具諡起居無恙。因出大著待訪錄、讀之再三。於是知天下之未嘗無人、百王之敝、可以復起、而三代之盛、可以徐還也。天下之事、有其識者、未必遭其時。而當其時者、或無其識。古之君子、所以著書待後、有王者起、得而師之。然而易窮則變、變則通、通則久。聖人復起、不易吾言、可預信於今日也。炎武以管見爲日知錄一書、竊自幸其中所論、同於先生者、十之六七。⁽²²⁾

頃^{このと}過^よ薊門^を、見^ま貴門^の人^を陳^の萬兩^の君^を、具^あ諡^を起居^を無恙^と。因^り出^し大著^の『待訪錄』^を、出^し、之^を讀^むむこと再三^{なり}。是^に於^て知^る、天下^のの未^だ嘗^て人^無き^にあらず、百王^のの敝^も以^て復^び起^すべく、三代^のの盛も以^て徐^に還^すべきを。天下^のの事、其^の識^者有^るも、未^だ必^ずしも其^の時^に遭^{はず}。而^{して}其^の時^に當^{つて}は、或^は其^の識^無し。古^のの君子^の、書^を著^{して}後^に待^つ所以^は、王者^のの起^り、得^て之^を師^とする有^{れば}なり。然^り而^{して}易^にいはく、「窮^{すれば}則^ち變^じ、變^{すれば}則^ち通^じ、通^{すれば}則^ち久^し」と。聖人^復び起^るも、吾^が言^を易^えざるは、今日^に於^て預^め信^ずべきなり。炎武、管見^を以^て『日知錄』一書^を爲^す。竊^かに自ら

幸ひとするは、其の中の論ずる所、先生に同じき者十の六七なるを。

黄宗羲は、こうして博學鴻詞科の推薦をあくまで拒み、明史編集に自ら直接タッチすることはしなかったのであるが、實は次の記事が證明するように、彼より一代若い一門の弟子である萬斯同や子息の黃百家を清朝側に送り込むことよつて、自らは助言者として、或いは元老として明史編集に間接的に強い影響を與えていたのである。

宗羲雖不與修明史、然史官著作、常轉咨之。⁽²³⁾

宗羲は明史を修するに與らざると雖も、然も史官の著作するに、常に之を轉咨せり。

次にあげる、黄宗羲が都に赴く萬斯同を送った詩などは、彼の萬斯同にかける期待と信賴の氣持がよく現れていると言えるだろう。

史局新開上苑中 史局 新たに開く 上苑の中

一時名士走空同 一時の名士 空同に走る

是非難下神宗後 是非 下し難し 神宗の後

底本誰搜烈廟終 底本 誰か烈廟を搜して終へん

此世文章推婺女 此の世文章は婺女を推す

明初、修元史、以宋景濂、王子充爲總裁、皆金華人。今以徐立齋・葉詒菴爲監修總裁、皆崑山人、故以爲比。

明初、元史を修むるに、宋景濂・王子充を以て總裁と爲す。皆金華の人なり。今、徐立齋・葉詒菴を以て監修總裁と爲す。皆崑山の人なり。故に以て比と爲す。

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發 (竹村)

定知忠義及韓通 定めて知りぬ 忠義の韓通に及ぶを

憑君寄語書成日 君に憑み語を寄す 書成れる日

糾謬須防在下風⁽²⁴⁾ 糾謬 須らく防ぐべし 下風に在るを

また、顧炎武が弟子の潘耒や李因篤の任官を心よからず思っていたことは先に述べたが、その顧炎武でさえも、實はそれらの門弟を通じて陰に陽に史館に助言を與え、明史の編修に深い影響を及ぼしていたのである。李晉華は『明史纂修考』において、このことを次のように裏付けている。

而在野遺賢、如顧亭林・黃黎洲等、雖不拜新朝之命、然以史事關係至大。恐是非得失之不能盡當、不足以昭垂萬世、亦直接間接致其意於史館。

而して在野の遺賢の顧亭林・黃黎洲等の如きは、新朝の命を拜せずと雖も、然も史事を以て關係すること至大なり。是非得失の盡く當る能はずして、以て萬世に昭垂するに足らざるを恐れ、亦た直接間接に其の意を史館に致すなり。

こうして、清朝になってなお明の遺民として生きる顧炎武や黃宗羲の清朝との關わりを仔細に調べてゆく時、私は、そこに博學鴻詞科をめぐる彼らの遺民としての意識の微妙な變化を發見するのである。即ち、康熙十八年のこの時期に清朝の政權はもはや確定しており、明王の正統も絶え、明朝の復辟は現實の課題としてはもはや絶望的であった。このような狀況下において、明の遺民を誇る顧炎武や黃宗羲は、自ら任官して直接明史纂修に參畫することとはできないものの、友人知人を通じてせめて正確な資料による正しい明の歴史が書きつがれることに一縷の望み

をつないでいたのではないか。このような顧炎武や黄宗羲の態度の變化は、明清の政變後既に數十年を經、時は移り日は流れ、もはや明の遺民の多くがこの世からいなくなりつつあり、又、新しい世代として例えば王士禛などが清朝治下で華々しく活動し始めた情況の中で、微妙に屈折した遺民意識の現れであると言つてよいだろう。一方の清朝側にとつても、彼らが以前に見せていた執拗な反清行動は、それが蔓延する恐れがある限り、これを根絶する必要があつたが、このように明史の編修を契機として、學術的にしろ間接的にしろ彼らが関わってくることは、何の異議もないばかりか、むしろ歓迎すべきことでさえあつた。その意味で博學鴻詞科を開いた清朝の目論見はままと成功したのである。權力は、己れが強大であればある程柔和な様相を呈する。この時の清朝も、明の遺民の消滅がほとんど決定的な情況下にあつて、顧炎武や黄宗羲の存在にはなお寛大であつた。

こうして、強大な國家權力の前に個人の抵抗は敢なく壊え去り、顧炎武は博學鴻詞科より僅か三年後の康熙二十一年、黄宗羲はそれより更に十二年後の康熙三十四年にそれぞれ館を捐てる。清朝における眞の明の遺民は、ここに黄宗羲を最後として竟に拂拭するに至るのである。

四

冒頭にあげた博學鴻詞科に擧げられた五名の布衣出身者の中、馮島は、耿精忠の亂に卷込まれて閩中に客死した父の供養を申出て間もなく歸郷しているので、實際に清朝の祿を食んだのは四布衣ということになる。なお、これより以前に、所謂江南の三布衣といつて、康熙帝が姜宸英・朱彝尊・嚴繩孫の三名の布衣の安否を親しく下問した

エピソードを最初に紹介したが、この博學鴻詞科に姜宸英は採用されておらず、又後に明史館に入り、七品俸を食むよう推薦されたものの、實際に授官した譯ではない。更に次のように、毛奇齡を四布衣のグループに入れる記事もあるが、毛奇齡は採用時に蕭山縣の廩監生であったのであり、嚴密には布衣でなく、彼を四布衣のグループに入れるのは正しい稱呼でない。

同時授官者、子徳與蕭山毛奇齡・秀水朱彝尊・無錫嚴繩孫三人、號爲四布衣。⁽²⁶⁾

同時に授官する者、子徳(李因篤)と蕭山の毛奇齡・秀水の朱彝尊・無錫嚴繩孫の三人を、號して四布衣と爲す。

このような稱呼の混亂は、要するに、當時四布衣なる者が世評高く喧傳されたことによって派生したものと思われる。そこで、ここでは四布衣として李因篤・潘耒・嚴繩孫・朱彝尊の四名について見てゆくことにする。

李因篤(一六三二—一六九二)は陝西富平の人。幼くして孤、即ち幼くして父を失い、外祖父の田時需に撫育された。經學に深く、『詩說』を著して、顧炎武に「毛鄭に嗣音有り矣。」と嘆賞された。博學鴻詞科には、内閣學士項景襄・李天馥、大理寺少卿張雲翼の推薦によって檢討を授けられ、明史館に入った。しかし、すぐに老母の扶養の故を以て月を経ずして郷里に歸り、母の没した後も再び清朝に仕えることはなく、竟に一生を終っている。彼が郷里に旅立つ日、京師で之を送る者が數百人に達したという。「關西夫子」と稱せられて人氣のあつた彼の面目躍如たるものがある。彼は又、前明一代の事蹟に詳しく、史館で彼に及ぶ識者はいなかった。その晩年に横雲山人(王鴻緒)が『明史稟』を完成した時、わざわざ李因篤に校正を乞うて來た。既に郷里に退隱し、老齡の爲に病床に臥していた李因篤は、兩名の者を枕側に立たせ、『明史稟』を朗誦させてそれに訂正を入れたという。校正は約半年

で終つたが、これが爲に『明史彙』は益々名聲が上がつたのである。康熙七（一六六八）年、顧炎武が萊州黃培の文字獄に牽連して山東濟南で獄に下つた時、千里を遠しとせずして逸早く駆けつけ、その解決に力を盡くしたのは外ならぬ李因篤である。彼には又「哭顧亭林先生詩一百韵」があり、そこで顧炎武の死を慟哭している。このように李因篤と顧炎武の關係は至つて深い。又それだけに顧炎武は李因篤の清朝への任用をどうしてでも阻止したかつたらしく、顧炎武が李因篤の推薦者である李天馥へ宛てた手紙(26)などにはその氣持がよく現れていて興味深い。こうしてみれば、李因篤はなるほど一時は清朝に採用されたものの、授官の日に乞養の上表文を提出し、それが許可されるまでの一月に滿たぬ形式上の任官であつたのであり、顧炎武が望んだように、まずは布衣としての初志を遂げたと云えるであらうか。劉廷璣「在園雜志」は次のように誌す。

而最恬淡者、李檢討因篤、于甫授官日、旋陳情終養。上如所請、命下卽歸、更能遂其初志。(27)

而して最も恬淡なる者は李檢討因篤なり。甫はじめて授官する日に于て、旋すまひに終養せんことを陳情す。上、請ふ所を如す。命下れば卽ち歸り、更に能く其の初志を遂ぐ。

潘耒（一六四六—一七〇八）は江南吳江の人。博學鴻詞科には左春坊諭德盧琦、刑部主事謝重輝の薦によつて三三歳の最年少で二等二名に擧げられた。明史館に入つて後は食貨志兼他紀傳、及び洪武より以下五朝の稿を執筆したが、康熙二十三年秋七月には母の服喪の故を以て歸郷するに至る。しかし、これは實は、次に述べる朱彝尊の彈劾事件に連坐して、潘耒までもがそのあおりを受け、「浮躁」の理由で以て宮中から放逐されたのが真相とおぼしい。というのは、朱彝尊の筆になる潘耒の墓誌銘「贈日講官起居注翰林院檢討徵士郎貞靖潘先生墓誌銘」に、

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

彝尊與君定交也久、同年被薦、同以布衣授官、同知起居注、其謫也又同時⁽²⁸⁾。

彝尊、(潘耒)君と定交するや久し。同年に薦を被り、同に布衣を以て授官し、同に起居注を知し、其の謫さるるや又同時なり。

とあり、又同じく嚴繩孫の墓誌銘「承德郎日講官起居注右春坊右中允兼翰林院編修嚴君墓誌銘」に、

逾年、予遂挂名學士牛鈕彈事、而潘君旋坐浮躁降調矣。⁽²⁹⁾

年を逾え、予(朱彝尊)遂に名を學士牛鈕の彈事に挂く。而して潘君^{たも*}旋ち浮躁に坐し降調さる。

とあるからである。その後、潘耒は竟に再び出仕することなく、郷里で餘生を終っている。ところで、李因篤と同じく、彼をも又己が信頼しうる同志と目していた顧炎武は、やはり潘耒の任官が本意ではなかったらしく、先にあげた顧炎武の潘耒に與えた手紙をはじめ、潘耒に關する顧炎武の記事は、そのことを示唆するものが多い。こうして、博學鴻詞科における潘耒の擧用は、同志としての期待が大きかった顧炎武にそれだけ大きな失望を抱かせることになったが、潘耒は實は顧炎武の思想を世に廣めるのに與つて力あつたと言わねばならない。それは、次の記事が示すように、潘耒が出資して顧炎武の遺書を刊行し、その思想を今日にまで傳え得ているからである。

顧炎武所著日知錄、多經世大業、耒在閩中、有贈買山資者、舉以刻之、始得于世。⁽³⁰⁾

顧炎武著はす所の『日知錄』は經世の大業多し。耒、閩中に在りしに、山を買へる資を贈る者有り。舉げて以て之を刻し、始めて世に得たり。

嚴繩孫(一六二三—一七〇二)は江南無錫の人。彼の傳記に關しては、親友朱彝尊の撰になる「嚴繩孫墓誌銘」が⁽³¹⁾

最も詳しく、かつ信頼できる。それによると、彼は博學鴻詞科には刑部主事俞陳琛の推薦で挙げられたが、體仁閣での召試の日に偶ま眼疾を患い、省耕八韻詩を一首屬ったのみで、あとは答案を完成させることができなかった。しかし、康熙帝は早に嚴繩孫の盛名を熟知しており、ために彼を第二等三〇名の末席で合格としたのであるという。史館にあつては彼は隱逸傳の執筆を擔當した。康熙二十三年冬には暇を請い、歸郷しているが、これも先の潘耒と同じく、朱彝尊の彈劾事件に關連してのものであることは、朱彝尊の撰になる「嚴繩孫墓誌銘」が次のように記すことによつて推察されるのである。

逾年、予遂挂名學士牛鈕彈事、而潘君旋坐浮疎降調矣。君遇人樂易、好和不爭、以是忌者差少。尋遷右春坊右中允、兼翰林編修、敕授承德郎。時二十三年秋七月也。冬、典順天武闈鄉試、事竣、君乃請假、天子許焉。

年を逾え、予（朱彝尊）遂に名を學士牛鈕の彈事に挂く。而して潘君（耒）、旋ち浮疎に坐し降調さる。（嚴繩孫）君、人に遇するに樂易し、和を好みて争はず、是を以て忌む者差や少なし。尋で右春坊右中允に遷り、翰林編修を兼ね、承德郎を勅授さる。時に（康熙）二十三年秋七月なり。冬、順天武闈鄉試を典し、事の竣るや、君乃ち假を請ふ。天子焉を許す。

最後に朱彝尊（一六二九—一七〇九）は浙江秀水の人。十七歳で明清の政變を経験して後、清朝にあつて清朝に仕えることをせず、三四年間の布衣生活を送つた彼は、五一歳、この博學鴻詞科で初めて清に採用される。明史館で彼は文皇帝本紀及び洪武朝臣傳三十篇を擔當した。後者は『曝書亭集』卷六二・六三・六四に收められるものである。しかしその官吏生活は順調には續かず、康熙二三年にはふとしたことで彈劾される破目に陥り、竟には辭職し

て歸郷することになる。彼が任官後の詩文をまとめた『騰笑集』には、節義を汚した彼の忸怩たる氣持がよく現れているのであるが、このことについて私は以前に考察を加えたことがあるので、ここでは再述を避け、鄧之誠の次の記事を掲げるのみにとどめる。

論者惜其輕于一出、終傷鐵羽。然觀所作弔李陵文、早已決心自獻矣。而後削文類布衣之稱、題詩集騰笑之名、毋乃忸怩乎。⁽³³⁾

論者其の一たび出づるに軽く、終に羽を傷鐵めるを惜しむ。然るに作る所の「李陵を弔ふ文」を觀るに、早已自ら獻ずるを決心したり。而る後文類・布衣の稱を削りて、詩集に騰笑の名を題したるは、乃ち忸怩たる毋なきか。

朱彝尊について、もうひとつ特筆することは、この康熙十八年己未に行なわれた博學鴻詞科についての総合的記録である『鶴徵錄』が、もともと朱彝尊の發案になることである。即ち次の資料に示すように、朱彝尊はこの時に博學鴻詞科に關わつた全ての文人について、「同時に薦を被る百八十六人は、皆經世著述の才を負ひ、以て傳無かるべからず。鶴徵錄の一書を成さんと思ふ。」と述べている。ここには、自分も參畫したこの博學鴻詞科を天下の一大盛事ととらえ、その記録を後世にまで傳えようとする「後死者」朱彝尊の熱意がありありと見てとれる。因みに言えば、秦瀛『己未詞科錄』は、この『鶴徵錄』の不備を補おうとしたものであり、孟森「己未詞科錄外錄」は更にそれを敷衍したものである。

向者、竹翁晚年欲爲鶴徵錄、而未就。蓋因己未同舉之一時名賢、毋論遇不遇、崖略其人之人品學問、而傳之天

下後世、誠後死者之責也。⁽³⁴⁾

向者、竹翁（朱彝尊）晩年に鶴徵録を爲らんと欲するも未だ就らず。蓋し己未同舉の一時の名賢は、遇と不遇とを論ずる毋く、其の人の人品學問を崖略し、而して之を天下の後世に傳ふるは、誠以後死者の責めなるに因つてなり。

吾里朱竹垞先生、嘗謂同時被薦百八十六人、皆負經世著述之才、不可以無傳、思成鶴徵録一書、未及屬藁。⁽³⁵⁾吾が里の朱竹垞先生、嘗に謂へらく、同時に薦を被る百八十六人は、皆經世著述の才を負ひ、以て傳無かるべからず。鶴徵録の一書を成さんと思ふも、未だ藁を屬するに及ばずと。

（朱彝尊）先生、以同時被薦百九十餘人皆著作之材、不可無傳、思輯爲鶴書集、未暇采録、因屬其踵成焉。
（謙、少時、於王梧村案頭、見先生手藁數十番、名鶴徵録⁽³⁶⁾）。

（朱彝尊）先生の以へらく、同時に薦を被る百九十餘人は、皆著作の材にして、傳無かるべからず。輯して鶴書集を爲らんと思ふも、未だ采録するに暇あらず。因りて其の踵成するを屬せり。（謙、少き時、王梧村の案頭に於て、先生の手藁數十番、鶴徵録と名づくるを見たり。）

五

このように、清朝の天下に鳴物入りで華々しく登場した四名の布衣は、數年を経ずして悉く宮中から姿を消すことになる。とりわけ、採用後一月にも満たぬうちに離任歸郷した李因篤を除けば、康熙二十三年中の一年において

朱彝尊・潘耒・嚴繩孫の三名が彈劾を受け、もしくはそのとぼちちりで相次いで左遷されているのは、一種壯絶な感じすら與える。このことについて、鄧之誠はいみじくも次のように指摘する。

鴻博之試、諸生布衣入選者、未幾皆降黜、或假歸。始則招之、唯恐不來、繼則揮之、唯恐不去矣。⁽⁹⁷⁾

鴻博の試、諸生布衣の選に入る者、未だ幾いふばもせずして皆降黜され、或は假とりて歸る。始めは則ち之を招きて、唯だ來らざるを恐れ、繼では則ち之を揮ひて、唯だ去らざるを恐る。

更に、孟森もこの博學鴻詞科における「布衣」の出處進退について、次のように特に注意を喚起する。

制科人材、當時所忌者惟三布衣。以其與科目常流獨異。三布衣入史館數年、於康熙二十三年一年中、竹垞鏞級、稼堂奪職、皆由掌院具劾。藕漁乞歸、亦在是年。所謂掃迹木天者此也。⁽⁹⁸⁾

制科の人材、當時の忌む所の者は惟だ三布衣なるのみ。其の科目に與るや常流に獨り異なるを以てなり。三布衣、史館に入ること數年、康熙二十三年の一年中に於て、竹垞（朱彝尊）は鏞級され、稼堂（潘耒）は職を奪はる。皆掌院に由て具に劾さるるなり。藕漁（嚴繩孫）の歸を乞ふや、亦た是の年に在り。所謂迹を木天より掃ふ者は此れなり。

ここに引用したように、鄧之誠が「初めは則ち之を招きて唯だ來らざるを恐れ、繼いでは則ち之を揮ひて唯だ去らざるを恐る」といい、あるいは孟森が「迹を木天（翰林院）より掃う」というのは、明から清に至る過渡期における布衣の運命を言い得て妙である。即ち、清朝側からすれば、明代から盛名をかちえている遺民はもとより、布衣の士の存在は、それが文壇に占める位置が大きいだけに無視することはできなかつた。そこで明史編修という名

目を設けて敢えて布衣の採用にふみきつたのであるが、數年後にはもう彼らも必要でなくなり、その存在が嫌ましくさえなってきた。そこで一轉して今度は四布衣の追出しにかかるのである。鄧之誠の「始則招之唯恐不來、繼則揮之唯恐不去」とはまさしくこのことを指す。

このことを四布衣の側から言い換えるならば、この四人の布衣においては、明の遺民としての意識、あるいは清の忠臣としての意識が、世代的に見て、顧炎武や黃宗羲ほど強烈に自己の出處進退を規律づけるものではなかつたのである。⁽³⁹⁾ また繰り返し當の清朝側についてこれを言えば、顧炎武や黃宗羲などの眞の明の遺民が世代の移ろいの中に漸滅していく情況下にあって、明史編修の必要から、或いは己が權力誇示の爲もあって四名の布衣を任用したものの、數年後にはそれもほとんど必要でなくなり、竟には四名の放逐によって明朝の遺風は完全に拂拭されたと見ることが出来る。そしてその後に来るものは、名實共に備わつた新たな清朝文學の始まりであつたのである。

以上の考察によつて、康熙十八年に行なわれた博學鴻詞科をひとつの大きな轉換點として、その後の清朝文學が實質的に出發したと言えよう。そしてその出發は、あくまでも清朝の枠内でのみ可能であつた。あたかもこのことを裏付けるかのように、この時に行なわれた『明史』の編修は、その後に續く一連の文化編纂事業、つまり『淵鑑類函』・『佩文韻府』・『康熙字典』・『古今圖書集成』・『四庫全書』・『駢字類編』・『全唐詩』・『全唐文』・『大清一統志』などの輝かしい編纂事業の濫觴として位置付けられるものである。

こうして、康熙十八年の博學鴻詞科は、その後の清朝文學の展開の仕方をほとんど決定づけた最初の重要な事件であつたと言えるであらう。

註

- (1) 哈佛燕京學社引得特刊『増枝清朝進士題名碑錄附引得』に據る。
- (2) 沈德潛『博學鴻詞攷』。秦瀛『己未詞科錄』卷一に據る。
- (3) 秦瀛『己未詞科錄』吳騫序。
- (4) 孟森『明清史論著集刊』所收「己未詞科錄外錄」。
- (5) 陳守實『明史扶微』。
- (6) 江南の三布衣とは朱彝尊・嚴繩孫・姜宸英を指す。全祖望「翰林院編修湛園姜先生墓表」、鄭方坤「葦間詩鈔小傳」、及び王士禎「池北偶談」などに見える。
- (7) 日付は陰曆を示す。以下同じ。
- (8) 『聖祖仁皇帝實錄』卷七十一。
- (9) 人數には若干の出入がある。例えば施閏章「愚山年譜」には「同試者一百七十五人」といい、朱彝尊「竹垞年譜」には「同徵一百九十餘人」とある。また王阮亭「池北偶談」や方渭仁「松櫨筆乘」は共に一百八十六人説をとる。ここでは「鶴徵錄」や『己未詞科錄』を参照して、後説に従った。
- (10) 孟森「己未詞科錄外錄」より引用。
- (11) 秦瀛『己未詞科錄』卷九より引用。
- (12) 顧炎武『亭林文集』卷之四「與人書二十四」、また『蔣山備殘稿』卷二。なお清水茂氏「顧炎武集」(昭和四十九年 朝日新聞社 中國文明選第七卷)に解説がある。
- (13) 孟森「己未詞科錄外錄」より引用。
- (14) 毛奇齡『西河合集』卷四「寄張岱乞藏史書」。なお松枝茂夫氏「張岱の『陶庵夢憶』を讀む」(岩波書店『文學』一九七九・八 第四十七卷)にも言及するところがある。
- (15) 彭紹升編顧炎武『亭林餘集』所收「先妣王碩人行狀」。また『亭林文集』卷之三「與史館諸君書」、及び『蔣山備殘稿』卷一「與館中諸公書」には、「我雖婦人、身受國恩、義不可辱」とある。
- (16) 顧炎武『亭林文集』卷之三「與葉詡菴書」、及び『蔣山備殘稿』卷二「與同邑葉詡庵書」。
- (17) 顧炎武『亭林文集』卷之四「答次耕書」、及び『蔣山備殘稿』卷三「答潘次耕」。
- (18) 清水氏前掲著一七七頁。この詩「關中雜詩」五首は『亭林詩集』卷之五所收。
- (19) 顧炎武『亭林詩集』卷之五。
- (20) 秦瀛『己未詞科錄』卷十一引「若舫叢話」。
- (21) 全祖望『鮚埼亭集外編』卷三十一「書明夷待訪錄後」。

なお西田太一郎氏譯『明夷待訪錄』（平凡社 東洋文庫二〇 昭和三九年）に、この全祖望「書明夷待訪錄後」、及び次に掲げる顧炎武「與黃太沖書」を譯出する。

(22) 張穆『顧亭林先生年譜』卷三康熙十五年條所收、顧炎武「與黃太沖書」。なお前注(21)参照。

(23) 錢林『文獻徵存錄』卷二黃宗羲條。

(24) 黃宗羲『南雷詩曆』卷二「送萬季野貞一北上（己未）」。近藤光男氏『清詩選』（集英社 漢詩大系二二）六一頁参照。なお『南雷詩曆』卷四には、やはり「送萬季野北上」という題で次の七律一首が輯録されており、萬季野と別れゆく黃宗羲のやるせない氣持が誌されている。

三疊湖頭入帝畿

十年鳥背日光飛

四方聲價歸明水

一代賢姦托布衣

良夜劇談紅燭跋

名園曉色牡丹旂

不知後會期何日

老淚縱橫未肯稀

康熙十八年博學鴻詞科と清朝文學の出發（竹村）

三疊湖頭 帝畿に入り

十年 鳥は日光に背きて飛ぶ

四方の聲價は明水に歸し

一代の賢姦は布衣に托す

良夜の劇談に紅燭まぼろし跋またき

名園の曉色に牡丹まだら旂またく

知らず 後會は何れの日を期せん

老淚縱横として未だ稀くを肯んぜず

(25) 吳映奎「顧亭林先生年譜」康熙二年條。

(26) 顧炎武『亭林文集』卷之三「與李湘北書」、及び「蔣山傭殘稿」卷二「與李湘北學士書」。

(27) 蕭一山『清代通史』（七七三頁）より引用。

(28) 朱彝尊『曝書亭集』卷七十六。

(29) 朱彝尊『曝書亭集』卷七十六。

(30) 李調元『淡墨錄』卷五潘耒條。なお顧炎武『日知錄』潘耒序を参照。

(31) 朱彝尊『曝書亭集』卷七十六「承德郎日講官起居注右春坊右中允兼翰林院編修嚴君墓誌銘」。

(32) 拙稿「朱彝尊の遺民意識」（九州大學文學部『文學研究』第七十七輯 一九八〇年）。

(33) 鄧之誠『清詩紀事初編』卷七朱彝尊條。

- (34) 李集「鶴徵錄小叙」。
(35) 李富孫「鶴徵錄續輯序」。
(36) 楊謙「朱竹垞先生年譜」康熙四十八年條。
(37) 鄧之誠『清詩紀事初編』卷三潘耒條。
(38) 孟森「己未詞科錄外錄」。
(39) 前揭拙論參照。